

コロナ禍におけるイベント自粛解除直後に行われた

あの伝説的公演から早3年…

更なる高みへと歩みを進める小山実稚恵、待望のソロ・リサイタル

2020年、イベント自粛によりすべての演奏会が無くなり、その後ようやく規制が解除された同年7月に行われた前回のリサイタル。

小山実稚恵にとっても自粛後初となった公演であったが、彼女はいつもとまったく変わらぬ穏やかな雰囲気でも舞台上に登場し、弾き始めた。演奏中は、それこそ見た目にはいつもと同じ様子であったが、そこから出てくる音楽は、まさに特別。

言葉にはし尽せない、極めて難しい状況であった当時を噛みしめ

た上で、音楽家として、音楽に集中する… まったく表面的ではない、何か深いところの思いが込められた音楽、特にベートーヴェンのピアノ・ソナタ第31番の神がかり的な演奏に彼女の矜持を見たのは、筆者だけではないだろう。

あの伝説的な公演から早3年、同じ場所で再びリサイタルが実現する。各地でコンサートも再開され、時代が前に進まんとしている現在だからこそ、今一度、小山実稚恵のピアノを聴いてみたい。

小山実稚恵(ピアノ) *Michie Koyama, piano*

圧倒的存在感をもつ日本を代表するピアニスト。チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクール入賞以来、常に第一線で活躍し続けている。

協奏曲のレパートリーは60曲を超え、国内外の主要オーケストラや指揮者からの信頼も厚く、数多くの演奏会にソリストとして指名されている。16年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した『12年間・24回リサイタルシリーズ』(2006年~17年)や『ベートーヴェン、そして…』(2019年~21年)が、その演奏と企画性で高く評価された。2022年からはサントリーホール・シリーズ、第1シーズンConcerto〈以心伝心〉を25年まで開催する。

これまで共演したオーケストラとして、国内の主要オーケストラはもとより、モスクワ放送響(現チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラ)、ベルリン響、ロイヤル・フィル、BBC響、イギリス室内管、ロッテルダム・フィル、シンフォニア・ヴォルソヴィア、ワルシャワ・フィル、モントリオール響、ホルティモア響などが挙げられ、フェドセエフ、テミルカーノフ、マリナー、小澤征爾といった国際的指揮者と共演している。デュメイ、ギトリス、ブルネロといった名だたるソリストと室内楽で共演する。ショパン、チャイコフスキー、ロン＝ティボー、ミュンヘンなど、国際音楽コンクールの審査員も務める。

また東日本大震災以降は、被災地の学校や公共施設などで演奏を行い、仙台では被災地活動の一環として自ら企画立案し、ゼネラル・プロデューサーを務める『こどもの夢ひろば"ポレロ"』を開催。音楽を通しての心の交流の場、音楽に限らず子供たちが新たな体験をしながら、自分の好きなものを見つけられるような場を創りたいと、情熱を注ぐ。

CDは、ソニー・ミュージックレーベルズと専属契約を結び、32枚をリリース。近作の2つのベートーヴェン・アルバム『ハンマークラヴィア・ソナタ他』(2020年)と『ピアノ・ソナタ第30、31、32番』(2021年)は、深化するピアノイズムが大きな話題を集め、共に「レコード芸術」特選盤に選ばれた。5月3日には、33枚目の新譜「モノログ」を発売予定。著書として『点と魂と—スイートスポットを探して』をKADOKAWAより、また平野昭氏との共著『ベートーヴェンとピアノ』(全2巻)を音楽之友社より出版している。

2005年度文化庁芸術祭音楽部門大賞、2013年度東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門本賞、2013年度レコード・アカデミー賞(器楽部門「シャコンヌ」)、2015年度NHK交響楽団「有馬賞」、2015年度文化庁芸術祭音楽部門優秀賞、2015年度ミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞。2018年度大阪府市民表彰を受ける。2017年度には、紫綬褒章を受章している。

東京藝術大学、同大学院修了。吉田見知子、田村宏両氏に師事。



Michie Koyama
PIANO RECITAL 2023